
俺はクールな異世界旅行者！？

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はクールな異世界旅行者！？

【Nコード】

N8555Z

【作者名】

アセット

【あらすじ】

少年の名は神崎 直人。人の危機に敏感であるところ以外はごく普通の高校生であった。そんな彼は二次創作などでよくある異世界トリップを突然に経験してしまう。少年は異世界で何をしてしまうのか。はたまた何もしないのか。主人公は最強です。苦手な方はバックを。

プロローグ（前書き）

ハジマリ。

プロローグ

俺はいつもと同じ生活サイクルの牢獄から抜け出したいと考えているごく普通の高校生。名前は神崎 直人。ありふれた名前だ。

学校に通い、習い事や部活を頑張るなんてもう面倒だ……

いや、面倒というのは少し違う気がする。正確には、飽きた。

毎日、同じことの繰り返し。流石に堪えてきた。

俺はそんなに非日常？というものを体験したいっ！というような性格ではないが、年は高校生。いつもと違う刺激くらいは欲しかった。

言うならば、料理のスパイスほどの刺激。この例えがわかり辛いのなら、そうだな…… 寿司に付き物のわさびみたいなもの。

そんな刺激を求めている。

「くだらない。そんな刺激が俺の元にくる筈がないか。俺は平凡な没個性な人間だからな」

何を考えていたんだか。今日の俺は少しおかしいな。学校の帰り道の冬の寒さに頭でもやられたかな？

「今日は気分転換にいつもと違う道でも歩こうかなっ」と

俺は雪が溶けて出来た水溜りをまたぎながら呟く。今年は寒いなあ。

しかし、なんだか今日は家に帰りたくないなあ。何なんだ？この気持ち。

俺の心が非日常でも求めてんのかな。それはあるかも。少しの刺激なら大歓迎だ。

この世の中はつまらない。俺の身には余る。
この世界は俺にとってはどこまでも退屈だった。

「なら、このつまらない世界から開放してあげましょうか？」

「！」

不意に。後ろから。怪しげな男の声が聞こえた。俺の背筋が凍りつく。俺は蛇に睨まれた
カエルのように動けない。

「どうしたんですか？体が強張っていますよ
？せっかく今、貴方は非日常に巡り会えたというのに」

何だ？何を言っている？後ろにいる男は自分の存在自体が非日常とでもいいのだろうか？しかし、馬鹿には出来ない。後ろにいる男からは、何か得体のしれないものを感じるからだ。

俺の全神経が警鐘を鳴らす。この男と関わってはいけなないと。いや、もはや後ろにいる「モノ」が俺には男かなんてわからない。先入観で決めていただけだ。とにかく、後ろの異形から逃げなければならぬと俺はこの時、強く思った。

俺は右足に力を入れる。しかし、金縛りにあったように動かない。

「う、動け！」

だが、俺の右足は動かない。俺の意思に叛くかのように動いてくれない。

「何故、私から逃げるのですか？ 非日常を望んだのは貴方なのに」

後ろの「モノ」が俺に問いかける。感情を感じさせない、無機質な声。

俺は「モノ」に初めてまともに言葉を返す。

「俺は確かに少しくらい非日常を望んだかもしれないが、アンタは過分なんだよ！」

そう過分なのだ。非日常の取り過ぎ。非日常と日常のバランスが崩れてしまうほどの非日常など俺は求めていない。だが、後ろの「モノ」と関わると、絶対に俺はイントウザ非日常を遂げてしまう気がする。

だから、俺は逃げる。この不気味な「モノ」から。

「何が過分なのかはわかりませんが、私は貴方を送り届けるよう上から言われているのでそれをこなすだけです」

後ろがざわめく。冬のある小道の一角が暗くなる。後ろの異形が不意に俺の腕を掴む。

「っ！離せ！」

「無理です。仕事ですの」

異形が丁寧に話す。仕事？なんの事なんだろうか？

「貴方には異世界に行つてある事を成し遂げてもらいます」

いせ．．．異世界！？

「異世界だと？頭でもおかしくなったか？」

もしかしたら後ろの異形はただの頭のイかれた電波君かもしれない。そもそも後ろの「モノ」は異形でも何でもないのかもしれない。

ただの不審者かも知れない。そんな観測が俺の頭をよぎる。

「おかしくなってます。とにかく私はただ上の任務を遂行するだけ．．．」

俺は、決めた。後ろを振り向こうと。後ろの奴が不審者だった場合後ろを長時間隙だらけにするのは得策ではない。

一、二、三で振り向こう。最初は後ろの奴の雰囲気呑まれっぱなしだったが、案外対した事のないただの不審者かもしれない。

不審者を対した事のない問題と言えるあたり俺は後ろの異形に相当臆していたんだと思うんだ。

じゃあ、やるとしよう。

一、

二、

三！

俺は後ろを振り向く。その瞬間、俺は異形の顔を見て体が固まった。

ああ。間違いない。俺は確実に今、非日常イベントに巻き込まれている。

後ろの異形の目が三個あったからだ。

後ろの異形の顔が皮肉げに歪む。

「選ばれた少年ご案内」

後ろの異形が俺の腕を思いっきり引っ張る。

「あ、そうそう。上から貴方に力を譲渡するようにといわれていたんですよ」

力……？

異形の腕？から俺に力が送られる。何だか暖かい。少なくとも俺に悪影響を及ぼすものではないみたいだ。

いや、逆に体が軽く感じる。

「おい。お前……俺に何をした？」

「それは、おいおいわかるでしょう。貴方の目的と、共にね」

異形が異次元の割れ目？みたいなモノを作った。

「何だ……それは……本当にお前は……」

「では、今度こそご案内させていただきます」

「神に選ばれた少年お一人様ご案内！」

異形がさっきまでとは違う軽快な口ぶりで言った。

俺は異形に押され、意識ごと異次元の渦にもってかれてしまった。

プロローグ（後書き）

ツ
ツク

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そうだ！今……俺……

長っ！サブタイトル。

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そうだ！今．．．俺．．．

俺は気がついたら草の上に仰向けで倒れていた。辺りの景色はRPGの序盤で立ち寄るような森だった。美しい木々が風で揺らめいて俺にこの場所が森だとはっきり分からせてくれる。

俺、何時の間にこんなところへ来てたんだ？

ん．．．．．そういえば、さっきまで俺は何を．．．．．

あ！

帰りの途中で俺は三つの目を持つ異形に何かされたんだった。確か、異形は俺を異世界に送るとか何とかぬかしていたが．．．

ここって異世界なのか？この森が？

まさか。ありえない。どうせ自然公園かなんかってオチだろ。

あの三つ目の異形も俺が非日常を求めるばかりに現れた悲しい幻覚。そう考えるのが一番しっくりくる。たしかに俺自身は次元が裂けるのを見たり、三つ目の異形を見たのを自覚しているが．．．

それでも、異世界のことは信じられない。ここが？異世界？馬鹿な。そんなことはありえない。さっさとこの自然公園から出て家に帰ろう。

ていうか、誰だよ。あんな三つ目の異形のセットまで持ち出して俺に壮大な悪戯を仕掛けたのは。しかも、通学路から自然公園みたい

なところまで拉致るって……

恨まれてんのかなあ。普通に過ごしてきた筈なのに。鬱だ。

しかしこの自然公園、俺が住んでる近郊にこんなに緑が豊富な場所あったか？

いや、ないな。大分遠くまで拉致られたか。よく見れば周りも草や木々がちゃんと整備されていない。生えっぱなしだぜって感じた。

うん。ここは、公園の類では無いみたいだ。草が整備されて無いし。

俺は結構都会に住んでいるんだが、こんな緑がきれいな場所がまだ都会にあったとは驚きだ。

この悪質な悪戯を忘れた頃にまた来ようかな。何だかんだ言って緑には癒される。そういえば、今気づいたが俺の学生カバンが無い。

財布入ってたのに……まさか悪戯したやつにパクられた？おい。普通に犯罪の香りがするんだが。荷物荒らされた。最悪だ。

まあ、携帯はポケットにいつも入れてるから携帯はパクられてはいない様だ。

良かった。今、辺りは朝。俺が異形（もはや俺の中では変態不審者）に絡まれたのが夕方だから、一夜明けてしまったことになる。親が警察に連絡をいれてもおかしくないレベルになってしまった。

一応、俺は無事ですよと連絡を入れておくか。

しかし、さっきから携帯の電波が圏外なんだが。ここ外だぞ？トネルもないし。バリ三だろ？普通。神崎 直人の常識が短時間になり崩されているんだがどうしてくれるんだ。

まったく。不審者にはタイホというきつい罰を受けて貰わないと気が済まないな。

はあ。携帯は使えないか。タクシーでも呼んで早く、家に帰ろうとしたんだが・・・ま、こんな森では車も入ってこれないか。

しかし、こうなると徒歩で家にご帰宅しなければならぬのか。俺は千葉に住んでいる訳だが、千葉にはこんな景色無いし・・・まさか圏外か？

圏外で圏外♪

すいませんでした。さて、どうするか。まあ、しばらく歩くか。とりあえず進めば何か分かるかもしれないしな。

意外と五分くらい歩けば、見慣れた景色にもどるかも。もしそうだったら僥倖だ。

まあ、教科書とか財布とかはどっかに吹っ飛んだけど・・・鬱だ・・・明日からどうしよう・・・

そういえば、さっきから複数の視線を感じるんだよなあ。背中がムズムズする感じ。「誰か」に見られている感じだ。いや、「誰か」というよりは・・・もっとこう・・・何だ・・・その・・・あれだよ！あれ！そう！犬に見られてる感じ！

そんな視線を感じている。野良犬か？まったく。場所が場所だけに動物も野性的になるのか？自然は動物を開放的にさせるし。

襲われたら、最悪だし走るか。自衛できないし。怖いし。野良犬なら少し走れば、まけるだろう。まさか、某ダメダメ少年のように延々と追いかけられる訳あるまい。

「ふう．．．．．ヨードン！！」

俺は走る。割と気楽な気持ちで。俺が走り出した瞬間、後ろの木々が揺れる。やっぱり何かにマークされてたみたいだ。

俺は後ろを振り向く。だって何に追われているくらい見たいだろう？

そしたら、信じられないものが俺の虹彩に映ってしまった。

俺を追っかけていたのは．．．．地球では絶滅した筈の所謂狼いわゆるだったからだ。

「は？まじで？」

こうして、俺と狼？のデス・チェイスが始まる。

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そうだ！今．．．俺．．．

現状把握はいるよね？

素直に絶滅しとけよ．．．．．

「うおおおおお！後ろ！後ろおおおおお！」

何で！？狼が！ここにいるんだ！やべえ。狼とか足早いじゃん。万年、帰宅部な俺じゃ絶対追いつかれる。

どうする？どうするんだよ。俺。

助けは呼べない。撃退も無理。このまま現状維持ではスタミナ切れで追いつかれる。追いつかれたらろくなことになる。てか、死ぬかも。

犬とかのレベルじゃねえ．．．しかも、狼って絶滅してたよな？ということとは、犬の新種か？俺の知らないうちに狼に限りなく近い犬の新種が？こんな草ボーボーば場所に？保護してやろうぜ。そういう団体さん。

はあ。俺は後ろを振り返る。やはり狼を振り切ることはできない。

あ、こういう時の警察か！携帯．．．携帯っと。

「圏外じゃねえええか！」

俺は叫び、思わず狼に携帯を投げつける。

「うわ！やっちゃった！」

携帯なげちゃった．．．俺の交友関係の塊が．．．はあ。まあ、

背に腹はかえられない。携帯は諦めよう。ん？狼が俺の投げた携帯に当たって吹っ飛んだ。数メートルも。

マジか。意外と狼って衝撃に弱いのか？石とか投げればスリップしてくれるかも。流石携帯。転んでもただでは転ばない。

そういえば、俺は全速力で走りながら割と冷静に生き抜く為に思考してる訳だが、何故考え事をする余裕が俺にはある？

一キロは走っている。しかも全速力で、だ。

体力もろくにない俺が何故、こんなにも動いている？息もまだ乱れていない。このまま狼としばらくチェイスを続けてもいいくらいだ。そのくらいの余裕が俺にはあった。

嬉しい誤算ではある。しかし・・・急に人間、体力が上がる訳はない。

俺は異形の言葉を思い出す。あの異形は俺に力を与えると云っていた。これもその力とやらの影響・・・か？

いや、この理論を認めるとあの異形が何か特別な力を持っていることになる。そうなると、ここが異世界だということも可能性が出てくる。あくまで、あの異形が何か特別な存在だという前提があっただが。

とにかく、俺の身体能力が不自然に上昇している。今まで付き合ってきた体だ。よくわかる。今、俺はかつてないほど身体能力が高くなっている。

これなら、逃げ切れるかもしれない。後ろの狼とも距離は縮まっていない。イケる。イケるぞおお！

それにしてもあの異形は何者だ？やはりただの不審者では無さそう
だ。

それに狼の存在。まさか犬の新種ではないだ
ろう。

これらの情報から考えるとここが異世界である可能性は限りなく高
い。

極め付けは携帯の電波が圏外ということ。異世界ならば、それも納
得できる。これは……

（異世界かなあ）

本気でそうかもしれない。認めたくはないが、きっと俺は何かに巻
き込まれている。

まあ、今考えることでは無いな。今は狼との
チェイスをどう乗り切るか。それが重要だ。

このままでは進展がない。ん？木々の間から光が差し込んでいる。
森が終わる！道に出るのか？広い場所に出れば状況も進展するかも
しれないな。よし！

俺は木々を突き抜け、無理やり森を抜ける。狼もその後ろを冷静に
マークする。まるで巢
に入った異物进行处理しようとするかの様に。

よし！林道っぽい場所に出た。というかこの道・・・コンクリートが欠片も見られない。科学技術が使われていない、天然で出来た道だ。

あたり一変そんな感じ。ただ、道が続くだけ。
。街も見えない。これは、いよいよ異世界クサくなってきた。

ん？馬車！？馬車だと！？馬車が林道を走っている！？

馬車か・・・異世界確定かな。中世ヨーロッパじゃあるまいし。異世界自覚させんなよ。クソが。

それにしてもこの道。俺と狼が絶賛止まりながら睨みあいが続いている訳だが、あの馬車どうすんだろ？俺と狼で道が完全に占拠されているからな。

すまない。馬車の運転手そして乗ってる人。この狼とのイベントに巻き込むかもしれん。

はあ。異世界とか。狼を撃退出来たら誰かに聞こう。本当に異世界かどうか。

百聞は一見に如かずって言うしな。まあ、馬車みた瞬間何かもう分かったけど。

「アルナ様！大変ですぞ！」

「どうしたのじいや。そんなに焦って。貴方らしくないわね」

何時ものじいやらしくないわ。何か馬車に不都合でもあったのかしら？早く王都に戻りたいのだけど……

「それがハイウルフが道を占拠しておりまして！このままでは馬車が進めません！それにこちらでも狼に視認されてしまいました！」

まずいわね……ハイウルフは見たものを追う習性があるわ。こうなると……今の私達にとれる適切な手段は……

「撃退するしかないようですぞ。アルナ様。不肖、このじいや。伊達に十五年間貴方の従

者を続けてきた訳ではありません。ハイウルフごときちぎっては投げ、ちぎっては投げましょうぞ！」

「でもそれでは、じいやが……」

「今の私達には護衛がおらず、自衛手段もないのです。分かって下さい」

そう言って、じいやはハイウルフに突撃していく。

「じいや！ダメ！」

ろくに戦闘もできない癖に……じいや……私にも何か出来ることやらなくちゃ！じいやを死なせる訳にはいかないわ！

私はハイウルフの群れにじいや同様、走って近づく。ハイウルフに

混じって一人じいや意外の人間がいたような気がしたけど、それは多分、気のせいだろう。

素直に絶滅しとけよ．．．．．（後書き）

じいやあ！死亡フラグ！少し駆け足すぎたかなあ？まあ、次回多分初戦闘ですよ（＾　＾）

神崎 直人の悪癖

俺は神崎 直人。今まで普通に十五年間、千葉県でそれなりにぬくぬくと幸せに過ごしてきた。

そう。俺は普通の人間だった。特別頭が言い訳でも無いし、顔もあまり良くはない。まあ、男の最低限のプライドとしては自分の事をブサイクとは言えないが・・・顔のレベルでいったら普通のそこらのモブと変わらないような顔だと思う。

唯一俺が持っている個性といえば、人の危険に敏感だということくらいだ。他人の身に危険が及ぶとつい、助けてしまう。そんな俺の悪癖。この悪癖のせいで、ほんの少しだが、俺の身に危険が訪れたことがある。俺の日常を崩さない程度の軽い事件だったが。

所謂、俺は見て見ぬフリが出来ない性格だった。この性格のせいで割に合わない目にあったことが俺の人生で多々あった。こんな性格に生まれたことを後悔しててくらいだ。

今もそうだ。俺は今、とてつもなく後悔している。何故かって？見知らぬじいさんを何故か抱きしめてるからだよおおおおお！！

時は二分ほど遡る。神崎 直人がじいさん抱きしめる前の事だ。

（このじいや。武術の心得も魔術の心得もありますまい。しかし、それでもやらなければなるまい。アルナ様のお家から、私はアルナ様を任されたのだ。護衛と変わらない。だから、私はアルナ様を「

無傷」で王都に送らねば……!!)」

そのためには、私の眼前にいるにつくきハイウルフを撃退しなければならぬ。

私は万が一と思い、持ってきたショートソードを持ちハイウルフとの距離を詰める。

「いくぞ！ハイウルフよ！このじいや。伊達にアルナ様の従者をやっっておりますぞ！とおう！」

ハイウルフが一斉に私に注目する。ん？一人、アルナ様とそう年が変わらない少年がおるではないか！

見たこともない服をきておるな……ギルド員が寄越したハイウルフの討伐員か何かか？
だとしたら、協力を仰げるかもしれない！

もちろん、私の剣はハイウルフに当たらない
このじいやの攻撃に慣れてこのままおめおめハイウルフには去って欲しいところなのだが……

そんな様子は微塵も見せない。これはまずい状況ではある。衛兵を雇わなかった、このじいやの落ち度か。王都から辺境の村に行く用事だと思い、舐めていたのかもしれない。

私もつくづく修行が足らん……!!きっとこのじいやだけではアルナ様をもう無傷で守れんだろう。ここは頼みこむしかない。ハイウルフと一緒にいる眼前の飄々とした優男に。すこしでもアルナ様の無事の可能性が高まる様に。

「その御仁！このハイウルフ撃退に協力してくれぬか！？」

私は眼前に居る少年に声をかける。こんな少年に頼る様ではもう私も末期だろうか？しかし、今は藁にも縋りたい気持ち。こんな少年でもないよりはマシな筈。勝手に助けを求めてこの考え草はないが、今はアルナ様をこの危機から救うことが重要なのだ……！！

「へ？」

対する少年の何とも頼りないことか。しかし、猫の手も借りたいのだ。勝手に巻き込ませていただく。私は無理矢理、少年に近づく。ハイウルフが私達を中心に円形になり始める

囲まれた。完全にハイウルフの領域に入ってしまった。しかし、これでいい。少しでもアルナ様が逃げて下されば……ってアルナ様ああ！！何故貴方もしれっと私達と一緒に囲まれて居るのですかああ！！

「アルナ様ああ！！何故えええ！！このじいや。どこでアルナ様の教育を間違ったああ！！」

甚だ疑問である。

「じいや。その言い草は無いんじゃないかしら？私はただ、貴方が心配で……」

「じいやはただ……アルナ様が無傷であればと思い、死地に赴いたつもりでしたが……どうやらアルナ様もハイウルフの領域に入られてしまった様です……」

ろくな装備も無ければ、武術もない。隣に居る少年も頼りないときている。終いにはアルナ様までここにいる始末。このじいや泣きそ
うですぞ。

私達三人はハイウルフ達と睨み合う。やはりハイウルフと改めて向
き合うと怖い。アルナ様を守りたいのだが、どうしても腰が引ける
「アルナ様ああ！！このじいやの後ろにー」

不意に。ハイウルフが動き出す。それはいきなりだった。私が大き
な声で叫んだからだろうか。きっとハイウルフ達を刺激してしまっ
たのだろう。ハイウルフ達が私に向かって襲いかかってきたー

私は申し訳程度にショートソードを振るったが、虚空しか捉えない。
ハイウルフは止まってくれない。

（これは、死んだか）

私は生を諦め目を瞑る。アルナ様の永遠の幸福を祈りながら逝く
しよう。どうせ、老い先短い身。最後まで華々しく散るとしよう
私はショートソードの他に隠し持っていたサバイバルナイフを準備
する。これでハイウルフに少しでもダメージを与えよう。

私に襲いかかる衝撃。しかし、それはハイウルフ達によっての牙に
よる攻撃では無く。今まで無関心そうにぼうつとしていた少年の手
による衝撃だった。

「そこの御仁よ！何を！」

私は少年に抱きしめられる形になっていた。少年が私を違う方向に

引き寄せてくれたことで私は難を逃れたようだ。

「これは元々、俺の責任だ．．．あんた達には悪いことをしたな．．．」

「これは元々、俺の責任だ．．．あんた達には悪いことをしたな．．．」

さて、俺がぼーんとしている間に俺と狼だけの空間だけだったのが何時の間にか凄く賑やかになっていた。

思わず狼が襲いかかってきたんで、その攻撃の軌道にいたじいさんを守ったんだが．．．

良かったんだよね？相変わらず俺は考えるよりも先に手が出てしまう。もう少し冷静にならなければ。せつかく人にも会えた事だし。

それにしても、この狼達をどうするか。しかし、俺は不思議と焦っていない。

それはたった一キロを全力で走っても疲れなかった事の高揚感からきているのだろうか。否、そうではない。今の俺には明らかに何かの力が付属されている。本能的にわかる。自分の体に何か異物が入り込んだことに。

だからだろう。そこまで焦ってはいない。その異物がとても強大なモノであることが分かっているからー

どんな力かは皆目見当もつかない。けど、今の俺は普段の俺とは少し違う気がするんだ。

もしかしたら、この狼達から巻き込んでしまった人達も助けることが出来るかもしれない

やれる可能性があるなら、覚悟を決めてやる

正直、怖いが今なら撃退出来る気がするんだ……

誰かを救いたいと思っている訳ではない。そこまで俺は聖人君子ではない。嫌なことからは目を背けるし、辛い現実から逃避することだってある。でも、巻き込んでしまったんだ。この人達を。俺という存在のせいで。なら尻拭いくらいしてやるよ。

ああ……また俺の「悪癖」が発動しそうだ……

これが俺の唯一の個性だった。この個性は俺に何度も迷惑をかけてきた。それでも……例えば、この行動の結果が俺に不幸をもたらすとしても、俺は……

「自分の問題くらい自分で解決してやるよおおお!!」

環境の劇的な変化が続いたからだろうか。半ば俺はやケクソ気味で狼に突っ込んだ。

神崎 直人の悪癖（後書き）

宣言通り初戦闘でしたね。じいやの（笑）
じいや視点は二度とかきたくないです。筆が進まん！

俺はいわゆるチートというものに対面したのか？ (前書き)

サブタイトルを変更。巫山戯過ぎた。

俺はいわゆるチートというものに対面したのか？

俺は燕尾服？みたいな服を着たじいさんから手を離し狼へと近づく。
この場を切り開くにはこの狼を倒すしかないな。武器は無いが、身体能力が上がってるみたいだからそこそこやれるかな？

そんな甘々な見通しで俺は狼に挑もうとしていた。

「はああ！これでもくらえよ！狼！」

俺は元々、こんなに荒々しく声を上げる性格ではないが、初戦闘のためテンションがおかしくなっていたのだらう。

俺は気合の入り込んだ声と共に狼を殴りつける。

「無茶ですぞ！その御仁！武器も持たずハイウルフに挑むなど！責めて、私のサバイバルナイフをー」

少女を庇いながら立っているじいさんが俺に正気か？とでも尋ねたような顔で俺を見てくる。

「そんなものはいらない！それに試したいこともあるしな」

狼は俺の攻撃を寸前で躲そうとするが、わずかに掠ってしまう。其れだけで狼は後退していく。いや、直人の拳に吹っ飛ばされた。

いわゆる「ぶつとび現象」。複数の狼が直人を見る。

今ので、狼の警戒対象が直人変わったようだ。

「良かったよ。どうやら俺の見通しはあった様だな。これで、狼に攻撃が弾かれていたらとんだお笑い草だったが」

これで確信した。俺の身体能力は確実に上がっている。狼の体重はそこの犬とそんなに変わらないと思うが・・・俺の拳で狼が吹っ飛んだんだ。少なくともこれで俺には戦う手段があることは分かった。

さて試したい事は終わった。後の目的は、残りの狼を倒してそこで仲良く震えているじいさんと少女から情報を引き出す事だな。

動物を倒すようで気分は悪いが、狼にはここで退場してもらおう。このじいさんと少女は戦えないみたいだしな。

「荒っぽいのは好きじゃないが、いかせてもらう！」

俺はまた狼と距離を詰める。しかし、狼もバカでは無い。今度は複数で襲いかかってきた

「チッ！」

四方からの攻撃で俺は後退せずを得ない。さすが群れの連携といったところか。それに俺自身痛いのは嫌だ。勘弁してくれ。

「ろくに狩りも知らない初心者が挑む相手じゃなかったか・・・」

俺は複数の狼に完全に弄ばれていた。一匹なら、なんとかいけるんだが、複数となると殴った後に隙ができてしまう。

その隙に噛まれたら最悪だ。首から上を噛まれたら確実に死ぬしな。

しかし、この身体能力のおかげで狼と対等以上に動けるな。普段の俺の動きじゃない。

動いているから死なないですんでいるんだが……うーむ。お互い打つ手が無いな。

そんな中、痺れを切らした狼の一匹がじいさんと少女達の方に向かう。

「ちょ！」

貴重な情報源が危ない！俺は咄嗟に少女とじいさんと狼の間に割り込む。じいさんと少女を護るように。俺は両手を広げ、狼に背を向け守りの体制を取る。

背中くらいなら噛まれても死なないだろ。そう覚悟を決める。いや、痛いのは嫌だが仕方ない。

「グォン！」

狼が寧猛な叫びを上げながら俺の背中に襲いかかる。狼は俺にしがみつき俺の首筋を冷静に狙う。

「こいつ！首を！」

背中じゃない！やべえ！死ぬ！呆氣にとられた俺は動く事も出来ず、狼の迫る牙を見つめる事しかできない。

「キャアアア！！！」

林道に響く少女の叫び声。大方、俺の凄惨たる亡骸でも想像したのだろう。叫びたいのはこっちだよ！噛まれるのは俺だもの。

いっそ、こいつらの事を見捨てれば良かった

でも、見て見ぬフリだけは出来ないしなあ。そんな事を思いながら俺は狼に首筋を噛まれた。

そして、俺は死ぬはずだった。頸動脈に思いっきり攻撃されたのだから。しかし、俺は無傷だった。代わりに倒れていたのは歯がボロボロになった狼だった。まさかー！

（身体能力だけではなく、俺の身体自身の防御力もあがっている？）
そうとしか考えられない。じいさんと少女も俺が死んでいないのを見て驚愕していた。

「じ、じいや！何であの方は無傷何ですか！ま、まさかゾンビ！？」

「ち、違いますぞ！あれは……まさか流体？」

「流体？」

「左様です。アルナ様。流体とはあらゆる攻

撃を受け流す拳闘家の防御の構えの事です。高位の拳闘家にしか体

現できないとしか言われていますが、あの御仁の飄々とした佇まいまさに、流体を極めた者の証です！」

「人は見かけにはよりませんね。私と変わらないような少年がそんな技を体現させるなんて」

「そうですね。きっとあの御仁は幼少のころから拳闘の道を進んでいたのでしょう。しかし、運がいい。私たちは助かりますぞ！」

「拳闘家がいてくれて助かりましたね。じいや」

「そうでございますなあ。アルナ様」

おいこら。こいつら、人任せにする気満々じゃねえかあああ！ふざけんなあああ！落ち着いてんじゃねええ！俺は狼処理班かあああ！

見捨てれば良かった。本気でそう思う。しかし、流体って……何？都合のいい様に解釈したのかな？まあ、いいけど。

狼の攻撃は俺に効かないみたいだし、サクッと狼を倒しますか。俺は残りの狼を順番に殴って吹っ飛ばし、戦闘を終わらせた。

俺を送り込んだ異形さん。身体能力チートくれたんなら、最初に言えよおおおお！！

俺らは、馬車の中で向き合う。戦闘の後俺が話がしたいと言ったら快く馬車に入れてくれた。ついでにじいさんは馬車の運転中なので、俺は少女と二人っき

り。気後れするが。

「あなたに聞きたい事がある」

俺は少女に尋ねる。名はアルナと言ったかな？ 従者付きなのを見ると身分の高い者のようだ。

「聞きたい事ですか？ 極力お答えしますよ。貴方は私たちの命の恩人なのでから」

「ありがたい。まず、ここは何処だ？」

「ここ……ですか？ 此処はセレーナ林道ですけど？」

聞き方を誤ったな。これではまだ外国の可能性がある。俺がこの人に聞きたかったのは此処が地球かどうか、否かだ。

「地球という単語を知っているか？」

言葉は通じているんだ。まだ、ここが異世界だとは限らない。

「地球？ 何ですか？ それ？」

少女の目に巫山戯た感じは無い。という事は…… ほぼ九割型ここは異世界決定か。

「悪い。もう一つ質問する。アメリカ、日本、携帯電話、ゲーム、パソコン。これらの中で知っている単語は？」

どれも異世界には無さそうなものばかりでポピュラーなものばかり。この質問に少女が一つも答えられないなら、ここは確実に異世界だ。

「すみません．．．一つもわかりません」

アルナという少女が告げたのは俺にとって非常に残酷な通知。さて、もう驚かない。実は狼に追われていた時から、ここ異世界じゃね？とうつすら認めていたからである。

「質問は終わりだ。聞いてばかりですまなかった。ところで、この馬車はどこに向かっているんだ？」

冷淡な口調で俺が告げる。非日常成分を摂りすぎて酔っているみたいだ。

「あ、それは王都イサラードですよ！私の故郷です。自己紹介が遅れました。私の名前はアルナ・シュルフィ・センセンスです。一応、階級は貴族になります。よろしく願いしますね」

「ああ、こちらこそ。よろしく頼むな。こちらは神崎 直人という名前だ」

優しそうな娘だ。良かった。最初にコンタクトをとった人が優しそうな人で。貴族だから
というって其れをおおっぴらにしないのもプラスだ。

「実は貴方をお願いしたいことがありますして王都についたら私の屋敷まで一緒について来てもらえませんか？」

「別に良いが．．．何のために？」

「それはじいやと三人で話した方が良いでしょう」

「そうですか」

まあ、やることも無いし良いか。命の恩人という立場を利用して仕事でも紹介してもらおうかなー

身体能力も上がっていることだし。出来る仕事の幅も増えた筈だ。

今思えば・・・ 異形は何故俺を異世界に送り込んだのかが分からない。しかもそこそ役立つ身体能力アップまでくれて。

まだ謎は多いが、俺はこれからこの世界でやっていくしかないみたいだ。

幸いアルナっていう俺と同じくらいの少女は優しそうだし、じいさんも面白そうだったし当分は何とかやっていけると・・・思うよ。

家族にもう会えないかもしれないというのは堪えるけど、な・・・
・ 未練タラタラだなあ。先が思いやられる。強く生きていかなければならないのに・・・はあ。

俺はいわゆるチートというものに対面したのか？（後書き）

何時もより乱雑な文に。直人は繊細だからストレスで死ぬかも。あ、ついでに身体能力チートと防御力チートは一緒くたです。総じて身体能力チートとさせていただきます。

専属

「あなたには私の専属護衛になってもらいたいのです」

「は？」

俺は今、センセンス家の屋敷にいた。センセンスとはアルナ嬢の家名。

そのセンセンス家の屋敷で俺はアルナ嬢から勧誘っぽいものをされていた。

「まず聞かせてもらおう。専属護衛とは何だ？」

唐突過ぎる勧誘だ。疑問もあって当然。

「専属護衛とは有り体に云えば、専属の護衛の事です。そのままの意味ですよ。ただ、専属といっても主人の側にずっといる必要はありません。あくまで、専属護衛とは主人が求める時にだけ参じればいいのです」

「ずいぶん自由な役職だな。それに何故、俺を専属護衛に選ぶ？」

「まず一つ貴方の階級が貴族では無いと踏んだからです。まさか……貴族の方ではありませんよね？」

もちろんだ。というか戸籍すらないだろう。つまり存在すら無いな。

「その心配は無いかと。アルナ様」

「じいや？」

「この御仁の服装はどこかの民族民のものでしょう。貴族が好んで使うような素材は一つもないようですし。それに……失礼ですが、言葉が無骨過ぎる。貴族の振る舞いでは無いでしょう」

「じいや。命の恩人に向かって！もういいです。とりあえず下がちなさい」

「アルナ様。確かに私はこの方に命を救われました。ですが！専属護衛にするとまでは――」

じいさんがアルナ嬢に訴える。アルナ嬢もそれに応える。

「じいや。あなたなら、賛成してくれると思っただけど……残念です。とりあえず、じいや。下がってください」

「ですが！」

「くどいです」

「………御意」

じいさんがこちらを恨むように見てくる。俺は関係無いぞ？

「貴方を専属護衛にしたいと思ったのはまだ理由があります」

「だろうな。貴族じゃない奴ならそこら辺に一杯居るし。貴方が明かしたのはあくまで専属護衛になるための前提条件のみだ。改めて聞こう。何故、俺を専属護衛なんかにしたんだ？」

まさか、狼を圧倒しただけでか？そのくらいなら誰でもとは言わないが、きちんと装備さえあれば誰だって出来る筈。

「まずは、貴方の強さを買ってです。見た目は少年ですが、そこらの騎士よりはよっぽど強そうです」

「あまり買い被らないでもraitいな。俺はそこまで強くない。荒事だって専門分野ではない。いざという時、俺では貴方を守れないかもしれないぞ？そういう「専門家」を専属護衛にした方がよっぽど有意義だと思うが？」

そう。戦闘の技術もクソもない。あるのは他人から与えられた不自然な力のみ。つまり戦闘に於いては素人。それに従者としての知識も無い。護衛としての性能は皆無だ。

「確かに護衛にそういう「専門家」の類の人はいます。しかし、私たちセンセンス家にはある事情があり、専門家を雇いたくても雇えないのです」

やっと裏が見えてきたな。事情だと？詳しく聞かせてもらおうじゃないか。

「事情とは何だ？」

「貴族の専属護衛とはですね。その貴族の家に代々仕える従者の家系から選ぶものなのです。その貴族の家系にずっと仕えてきた、影のように付き従う従者が通常では専属護衛になります」

「なら、センセンス家の従者の家系から選べばいいんじゃないのか？」

「残念ながら、センセンスは上位の貴族でありながら、従者の家系がないという変わった家系の貴族なのです。それは一代の間にセンセンスが成り上がった経緯からきています。故にセンセンスは激運の家系とも言われています」

なるほど。手頃な従者が居ないから、外から持ってきたというわけか。通りでこの屋敷、従者が数人しか居ないわけだ。

「別にセンセンスが落ちぶれた家系では無いんですよ？そこは分かっ
て下さいね」

「分かっている」

俺の怪訝な表情を見られたのだろう。注意されてしまった。

「それで、結局俺という者を専属護衛にしたいのは、何故だ？ 根本的な答えをもらいたいんだが」

「それはですね．．．人手が無いからです」

「人手？」

「専属護衛ともなると、ある一定の強さの基準がなければ駄目ですから。主人を守れなければ、意味が無いですし。実は今日、私が外へ出たのも専属護衛を見つけるためだったのですよ。ですが、専属護衛の基準を満たすものは中々いない。そして専属護衛を見つける事を諦めかけた帰り道、貴方がいたのです。私の為に拳を振るってくださった貴方が」

「．．．だが、さっきも言ったとおり俺は．．．戦闘は素人だ。買い被られては．．．困るんだ．．．」

「何も専属護衛は戦闘するものではありません。あくまで、主人の手助けをするものです。戦闘主体で考えなくても良いんですよ」

「それでも、君を守れなければ意味は無いんだろう？」

「そうですね．．．たしかに主人の危機には専属護衛が出なければいけません．．．」

「なら、俺には向いていないな。悪いな。貴族の貴方がこんな無骨な俺に頼み事をしているのに」

「それでも私はどうしても貴方に専属護衛になってもらいたいのです．．．」

「何故だ？何故そこまで俺にこだわる？」

「私は今まで、専属護衛がいなかったのですよ。いたのはじいやだけ。そんな中、私はいつ盗賊や魔物に屋敷が襲われるか不安で一杯でした」

「親に守ってもらえばいい。まさか、親にまで専属護衛がない訳では無いんだろ？」

「親は私が幼い頃、他界しました．．．私は、それから、じいやと数人の従者に守られながら生きてきたのです。いつも盗賊や魔物に怯えながら．．．」

「それは悪い事を聞いた．．．すまなかった。だが、そんな懸念があったのならもっと早期に専属護衛を見つけられなかったのか？」

「王都中の人を探しましたが、他人の従者を借りる訳にはいきませんし．．．それにギルドの上層部の強い人たちも他の貴族に抑えられていましたし．．．そ

れに普通の人では．．．貴族は守れない。そして、今日。ついに起こってしまったのです。私とじいやには手に負えない事件が」

あの狼の事か。

「貴方が私の命を救ってくれた時、私は心から思ったのです。こんな方が私の専属護衛ならいいなと。貴方は私達の最後の希望なのです。「普通の人」でありながら、専属護衛になれる唯一の希望。だから、どうか．．．助けて

．．．この不安からセンセンスを救ってくださいっ！」

少女が俺に祈るような声で告げる。対人能力の低い俺は戸惑う。そもそも同年代の女子と

話すのも中々無かったんだ。いきなり、こんなシチュエーションに巻き込まれても．．．

この人になんて言葉をかければいい？俺みたいな礼儀もしらないただの少年が今まで、怯え続けてきた少女にどう接せばいい？安易に専属護衛になると言えばいいのか？同情から

？馬鹿な。そんな感情で従者など務まる訳も無い。でも俺は目の前の少女を放っておけない。救ってやりたい。

俺の身体能力が役立つのなら、この人を助けてやりたい。そう思っているのに．．．最後の一

歩が踏み込めない。結局、俺なんかではこの人を守れない、と考えてしまう。

「それでも、俺では．．．俺なんかでは貴方を「俺なんかで何

ですか!」

アルナ嬢が俺の言葉に割って入る。大人しそうな彼女が。

「自分の事をそんなふうに見ないで下さい。

私は貴方のような人だからこそ、専属従者にしたいのです。怯えながら拳を振るえるあなただからこそ」

「俺が狼と戦ってる時、怯えてるように見えてたんだな……」

「怯えるのは、私の得意分野なので。分かってしまいました。それでも、怯えながら戦え

る貴方だからこそ私は……専属護衛にしたいのです。だから、自分を悪く思うのは辞めてください……」

最初は箱入り娘のお嬢さんとでも思っていた

。この子が狼の中に飛び込んできたときは馬鹿な奴とも思っていた。だが……それはあのじいさんを思っていた行動だった。

実際に今の彼女はとても理知的だ。普段の彼

女は利口なのだろう。ただ、人を大切にしま過ぎる悪癖があるだけで。

こんな人なら俺の異世界生活を預けてもいいかもしれない。他人の痛みが分かる彼女になら……

彼女は勇敢にも俺の心に切り込んできた。なら、俺も最後の一步を踏み出さなければなら

ない。

「決めたよ。俺は貴方の専属護衛になりたい
。いや、ならせて欲しい。こんな俺でもよろしく頼む」

「本当ですかっ！」

彼女の顔がパァッと輝く。露払いが出来て嬉しいのだろうか？

いや、彼女は俺のように卑屈ではないだろう
。純粹に仲間が増えて嬉しいとも思っていたいるに違いない。

「ああ。本当だ。これからよろしく頼む。アルナ嬢」

「……………何ですか？その呼び方は？」

「駄目だったか？」

「いえ。誰も私をそんな風に呼んでくれなかったので……………」

彼女が笑いながら答える。嫌味に聞こえるが
、彼女の場合は違うだろう。

「私も貴方の呼び方を考えないといけません
ね。うーん。あ！決めました！貴方の名前が神崎 直人だから……
・カンザキ！カンザキにします！」

「そのままだな……………」

俺が苦笑しながら応える。

「カンザキ！ よろしくお願いしますね！」

「ああ。こちらこそ」

彼女の笑顔を誰にも奪わせてなるものか。守り抜くんだ。専属護衛は俺なのだから。

彼女は俺の異世界での・・・最初の希望だから・・・

専属（後書き）

いろいろ端折りました。疑問に思った方はすいません。とりあえず、直人の拠点はセンセンス家の屋敷です。

希望と道標と色々と

俺はひとしきりアルナ嬢と談笑を交わした後、専属従者の契約をした部屋から出る。

「話は聞いておりましたぞ。神崎殿」

あ、アルナ嬢のじいさんか。あまり会話した事ないんだよなあ。

「何か用か？」

目上の人だというのについぶっきらぼうに返答してしまう。俺の駄目なところだ。

「アルナ様と専属契約をした様ですが・・・それに関して異存はありません。私も神崎殿に救われている身ですから。だが、しかしアルナ様とを裏切る様な素振りを一瞬でも見せたら・・・私は貴方を迷わず殺す」

アルナ嬢からじいやと慕われている身とは思えない底冷えした声。明らかに脅しが入っている。

まあ、当然の反応か。何処の馬の骨ともわからない奴がいきなり自分の主人の専属になったのだから。

「大丈夫です。俺は絶対彼女を裏切らない。彼女が俺を希望と言ってくれたように、俺にとっても彼女は希望なのだから」

俺は強くじいさんに言葉を返す。この世界の事を何も知らない俺に

とって彼女は女神にも思える。

「希望ですと．．．アルナ様が．．．貴方を？」

「ああ。そう言ってくれた。こんなに頼りない俺だというのにな．．．」

「そうですか．．．アルナ様。ついに自分の抛り所を．．．ついぞ私はアルナ様の抛り所になれなかったか」

じいさんが寂しげに笑う。自分の不甲斐なさを責めるように。

「神崎殿。無骨などなんだの私は貴方に罵声を浴びせましたが、私も貴方の事は気にいつている。だからどうか、アルナ様を支えてはくれないだろうか？それは私では出来ない事だから．．．」

「言われなくても当然だ。俺は彼女を支え続けよう。俺の全力で」

俺は今まで、アルナ嬢を支え続けてきたじいさんに敬意を込めながら返答した。

「ありがとうございます。神崎殿」

俺はじいさんに背を向け自分の自室に帰る。「専属護衛」として貰ったセンセンス家の自室に。

「しかし、広いなあ。流石、貴族といったところか」

俺の自室はかなり広かった。内装もホテルのスイートルームのようだ。

家具には一々、独特な紋様が刻まれている。センセンス家の紋様かな？

しかし、こんな部屋貰って良いのだろうか。一応、アルナ嬢に今晚宿が無いと言ったら・・・

（なら、センセンス家の一室にカンザキ専用の部屋を作っておきますね。あ、気兼ねする必要はありません。カンザキは私の専属護衛なんですから）

と、笑顔で言われてしまった。こんな部屋貰ってしまつて良いのだろうか。アルナ嬢の話だと専属護衛には報酬もあるらしい。それも従者の中でも一番高額な報酬らしい。

「こんな部屋まで貰って報酬とか・・・詐欺だな・・・」

俺は自室のベットに転がりながら、ひとりごちた。

「それにしても今日は色々な事があつた」

まず異世界に送られた事。次に狼。そして、アルナ嬢達との出会い。

「アルナ嬢達のおかげで、生活には困りそうに無いが・・・もし彼女達に出会えて無かつたと思うとゾツとする」

本当に良かった。でもそれでも。俺は怖い。一人この場所でやっていく自信がない。

「父さん！母さん！一葉！怖いよ……」

俺は一人、涙を流しながらベットで家族の事を考える。前者は両親達。後者は妹。

父さん……凛々しく厳格でいつも俺を後ろから見守ってくれた。

母さん……慈愛の表情で俺をいつも見てくれていた。俺の心の支えだった。

一葉……俺の大切な妹。いつも俺を慕ってくれていた妹。本当に大切な妹だった……

「おかしいなあ。向こうに居るときは、家族なんて当たり前のものだと思っていたのに。なんでこんなに悲しくなるんだか」

そう言いながらも俺の目からは涙が止まらない。

「アルナ嬢は強いな……幼い頃から家族がいなかったのに……それに比べて俺は……」

もう一度家族に会いたいと甘ったるい事ばかり考えてしまう。

「この世界で過ごしていく内に俺は自分の家族を忘れていくんだろうか？」

それは嫌だ。家族の顔だけは忘れない。携帯も何も無いけれど。俺と家族を繋げるものは何も無いけれど。俺は家族を忘れない。絶対に。

「俺は甘いな。こんなんで、アルナ嬢の護衛など務まる訳が無い。だけど．．．今日だけは、泣いてもいいよね．．．？父さん。母さん。一葉」

俺はわんわん泣いた。声を押し殺しながら。もう会えない家族や友人達を想って。

俺はここで生きていく。そう決めたよ。頑張るからさ。見守ってほしいな。

俺は家族に心の中でそう伝える。届きはしないけど。それでも、俺の中では意味がある事だから。

「もう、これで最後だ。あっちの世界を想うのは。これから、この世界で足掻くしか無いんだから」

未練は若干ある。だけど、決意はした。俺はこの世界で生きていく事をしっかりと再確認した。

まだ俺の目からは涙ばかりが出る。それを拭おうともせず、俺は眠った。

希望と道標と色々と（後書き）

連投く。まあ、補完ストーリーリーという感じ。

中庭での一幕(前書き)

アルナ嬢どうしようかなあ。メインかなあ。でも、プロットはなあ。

中庭での一幕

俺は少し充血した目でセンセンス家の居間にあたる部屋にいた。

目の前には朝食が並んでいる。俺の住んでいる世界でも普通にありそうなラインナップである。

「いいのか？居候にただ飯なんか与えて？」

「カンザキ！あなたは居候じゃありません。私の専属なんですから、これくらいは当然です。貴方が望むなら居・食・住をいつでも提供しますよ」

アルナ嬢がコーンフレーク？をスプーンですくって答える。

「破格の待遇だな・・・アルナ嬢まだ実はよく聞いて無いんだが、専属護衛って何をすればいいんだ？」

実はまだ専属護衛について俺はよく分かっていない。有事の際に主人を守るというらしいが・・・

「んー。専属護衛というのは、基本自由に行動していい役職なんですよ。主人が何も命じてない時は何もしないで良いんです。ただ、その代わり主人の有事の際には誰よりも働いてもらう役職なんですよ。従者というよりは護衛としての色が強い役職ですね」

「なるほど。だいたい把握した。しかし、連絡手段はどうするんだ？俺が基本自由ならこの屋敷にいない場合もあり得る。君との連絡手段は無いのか？」

「あ！カンザキ！良い所に目を付けましたね！ではこれを・・・
よいしょっと」

アルナ嬢が何処から取り出してきたのは青い宝石だった。それを俺に手渡してくる。

「魔力水晶です。私からの要請があった場合その石が光ります。詳しい場所までは特定出来ませんが、基本私は屋敷に居るので。遠出する場合はカンザキを連れて行きますし」

護衛としてな。なるほど。この魔力水晶とやらを使うのは、アルナ嬢が屋敷に居るときくらいの事か。遠出の際は俺もついていく事だし。それに、魔力水晶という物があるということは、この世界には魔法があるのかな？書庫でも行ってみようかな。俺の自室の隣にあったし。アルナ嬢もこの屋敷は基本的に自由に使って良いと言ってるし。専属護衛って給料泥棒だな。

「連絡手段については、わかった。なら、俺は少し出掛けて来る」

「いきなり出かけるんですか！？」

「ああ。試したいこともあるしな」

専属護衛初日だが、試したい事も色々あるからな。出掛けないと。

といってもセンセンス家の広い中庭に行くだけなんですけどね。

芝が綺麗に管理されている。流石、貴族の屋敷といったところか。
試したい事というのは、俺の身体能力の確認と魔法についてだ。

前者はほぼ試したが、狼の牙でも無傷とかどうなってんのか、よく確認したい。

後者は・・・わからん。この世界に魔法があるか分らないし。
アルナ嬢に魔法がこの世界にあるのか？なんて聞きたくはない。この世界で魔法が当たり前に流通していた場合、返答に困るからだ。よって、今ここで魔法があるか確かめたい。

まあ、魔法初心者がいきなり魔法とか無理だと思うし、書庫通いになりながら魔法の勉強をする可能性もある。

魔法がある前提の話だけど。まあ、それっぽいことはしてみるつもりだ。

まあ、今日したい事を簡潔に纏めると俺の戦闘力の確認かな？専属護衛は主を危険から守る仕事らしいし。

まずは何をしようか・・・

少年が自分の体を虐めて二時間がたった。中庭の芝の一部が吹き飛んでしまっていた。

この身体はなかなか異常の様だ。脚力とかおかしいし、分かった

ことはこの中庭では俺の全力をだしたら危ないということだ。頼もしい身体能力である。

この身体能力があれば、まあやっていけないこともないだろう。異世界生活。幸い仕事にはありつけたしな。

居・食・住もクリアしている。順調過ぎる位だ。

主人であるアルナ嬢も俺の無作法も許してくれそうだし、いい主人に巡り会えた。アルナ嬢のためにマナーも覚えるべきか？まあ、いいおこえるか。

この偉そうな無骨な口調だけは治りそうもないが。いつからこんな口調になったんだろうか。自分でも不思議だ。

まあ、それはいい。問題なのは、魔法だ。さっきから恥を忍んで「炎よ!」とか「異次元の審判者よ。今、我の呼びかけに応じ神の理を破壊せよ。デストラクション・ファイナル・ディザスター!!!!」などと叫んだが一向に効果は無い。よって魔法はあてに出来そうにない。俺が魔力の込め方を知らないとかそういう落ちかも知れないが。

「カンザキ!出かけるって言っても屋敷の中……ん?鍛錬でもしてたの?真面目ですね」

中庭の惨状を見ても何も反応していない。器が大きいのか天然なのか。アルナ嬢には興味が尽きないな。

「……専属護衛だから当然だろう」

「私もカンザキを見習わなければいけませんね。とかいいながら、魔法の練習はサボってばかりなんですけどね」

アルナ嬢が笑顔で言う。言質はとったな。この世界には魔法があるとの事だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ、カンザキに言っても仕方のないことでしたね。そうだカンザキ。屋敷の中で犬を見なかった？」

犬？この世界にも居るのか。

「いいや。見てないと思うが」

「まだ子犬で首輪をしていてですね・・・・やたらと人懐っこい犬なんですよ」

迷子の犬か？アルナ嬢の飼い犬かな？

「興味があったら、見にきてって・・・・あ。今、あの子迷子なんです・・・・・・・・」

アルナ嬢の飼い犬の線は当たりの様だ。

「早く飼い犬が見つかるといいな」

「そうですね。そういえば、カンザキは犬と猫どっちが好きなんです？」

「考えたことも無いが．．．俺はどっちも好きだな。犬は犬の、猫は猫の良さがあると思うしな」

「犬は主人に従順だし、猫は主人に素っ気ないところがいい」

そういえば．．．アルナ嬢は犬と猫の中間っぽいな。顔立ちもそうだが、雰囲気も。だが、強いて言うのならば、犬っぽいな。

「アルナ嬢は犬っぽいと言われたことは？」

「犬．．．ですか？」

「俺はアルナ嬢が犬に似ていると思う」

あ、やばい。失礼だったか。一葉とのノリで喋ってた。

「．．．そのようなこと、言われたないです」

少し怪訝な表情でアルナ嬢が言う。やっぱり失礼だったな。言わなきゃ良かった。俺は何を考えているんだか。

「そうか」

でも意外だな。アルナ嬢の雰囲気は動物を思わせるんだが．．．じいさん辺りに言われてそうだと思ったんだがなあ。意外だ。

「そういえばカンザキ。どのくらい鍛錬してたの？」

「朝食後すぐに始めたから、それほど経ってないな」

「いえいえいえ！もう二時間は経ってますよ！すごいですね。カンザキは。専属に選んだ甲斐がありました」

この身体能力のおかげでべつに苦にはなっていないだけだ。俺自身の能力じゃない。

「そうか」

「私はカンザキのその実直さが羨ましい……」

アルナ嬢が思わずという表情で呟く。うーん。これは俺自身の力じゃないからなあ。罪悪感を感じる。

「アルナ嬢はアルナ嬢でいいと思うぞ？」

俺も呟く。

「へ？カンザキ？」

「いや、今のは俺の独り言だ。気にしないでくれ……それより飼犬を探しているんだろう？邪魔して悪かったな」

俺はアルナ嬢に頭を下げ、その場を立ち去ろうとした。

「……い、いいえ……！！全然……邪魔ではないです……」

「カンザキと話すのは楽しいし……それにカンザキは何かオーラがあるというか……」

そう言うと、アルナ嬢は頬を赤く染めた。

「ん？」

こんな顔をするアルナ嬢は初めてだ。病気かな？心配だ。

「褒め言葉と受け取っておこう」

「そうだ！カンザキ！立ち話も何ですから、落ち着いて部屋でも話ませんか？」

アルナ嬢が無邪気な笑顔で俺に言葉をかける

「それは良いが・・・飼犬は？」

「・・・あ」

アルナ嬢がまた顔を赤く染めている。頭がいいのか悪いのかよくわからない娘だなあ。

「ふっ」

「あ！今、カンザキ笑いましたね！」

アルナ嬢が問い詰めるように俺に話しかける

「笑ってないぞ」

「笑いました！ニヤニヤしてました！」

「そうか」

「誤魔化さないで下さい!」

「飼犬は?」

「あっ・・・」

「それでは、失礼させてもらう」

今度こそ、アルナ嬢に背を向けて俺は屋敷に帰る。アルナ嬢が何か俺の背中に言っている気がしたが・・・聞こえなかったことにしておこう。

中庭での一幕（後書き）

これフラグかなあ？フラグってレベルでは無いよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8555z/>

俺はクールな異世界旅行者！？

2012年1月8日01時26分発行